

占領下の「原爆の凶展」

——室蘭と美唄の記憶

岡村 幸宣

二〇一一年一〇月 室蘭市民美術館「再現 原爆の凶展」

今年の一〇月二八日から三〇日にかけて、室蘭市民美術館で、六〇年前に開催された北海道最初の「原爆の凶展」を再現するという興味深い試みが行われた。

私は前日の展示作業と初日のオープニングに立ち会ったが、室蘭市民美術館が「市民に開かれた」活動を目ざしていることもあって、多くのボランティアが展示作業に参加し、手づくりの温かさが感じられる展覧会となった。オープニングは美術館開館以来という大勢の来場者でにぎわい、六〇年前の展覧会を観たという方や、展覧会の開催に関わった方も訪れて、貴重な証言を聞かせてくれた。

この企画の契機となったのは、二〇〇九年一月四日から二月二七日まで目黒区美術館で開催された「文化資源としての〈炭鉱〉」展であった。日本の近代化を基幹産業として支えてきた炭鉱を、絵画や写真、デザイン、映画などの視覚芸術がどのように捉えてきたかという視点で見つめなおす画期的な内容で、当時全国で盛んになっていた文化サークル活動にも焦点が当てられた。



「総合原爆展」会場前の子どもたちの集合写真

凶』を描いた丸木位里・丸木俊（赤松俊子）夫妻のもとには残されていなかった。

その後、美唄の郷土史研究家・白戸仁康の調査によって、会場が三菱美唄炭鉱労働組合本部であったことや、美唄市立沼しょうとろ東小学校（一九七四年廃校）の雑記録に、一九五二年一月二八日に「原爆展見学」を行ったと記されていたことも判明した。この時期に美唄だけで展覧会が開催されたとは考えにくいから、他にも道内に埋もれている「原爆の凶展」が存在するのではないかと考え、『北海道新聞』で証言の募集を行ったところ、一九五一年秋に丸木夫妻が室蘭、旭川、秩父別、札幌、函館をまわった〈第一期〉巡回展の他に、北海道大学の助教授や学生を中心に一九五二年一

月から五月にかけて全道三〇カ所におよぶ〈第二期〉巡回展が行われたという記録が、北海道立図書館所蔵の「松井愈氏資料」に存在することがわかった。

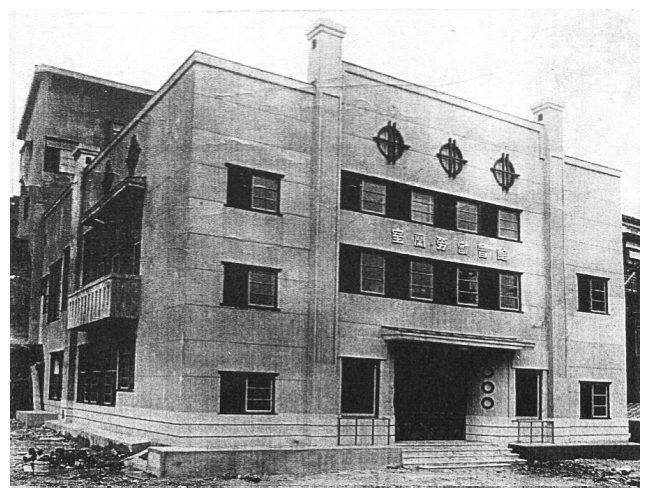
さらに白戸が道内の関係者に呼びかけて巡回展の調査を進めていくうちに、美唄の高校時代の友人で、現在は室蘭在住の画家・北浦晃との間に、六〇年ぶりの再現展という企画（室蘭に続き、二〇一二年一月に美唄、二月に深川での展覧会も開催予定）が持ち上がったのだった。

室蘭の再現展に先立つ一〇月二六日には、美唄市民カレッジで白戸による講演会「米軍占領下の『原爆の凶』美唄展 子どもたちの一枚の集合写真から」が行われるというので、私も美唄を訪れ、講演を拝聴するついでに、三菱美唄炭鉱の遺跡を巡った。

連合国軍総司令部（GHQ/SCAP）の占領下にあつた六〇年前の巡回展は、弾圧を警戒して新聞報道も少なく、主催者も記録を残さないことが多かったが、室蘭と美唄では、比較的多くの証言と資料が掘り起こされている。そこで占領下の「原爆の凶展」の状況を示す貴重な例として、今回の現地調査で得た情報も踏まえながら二つの展覧会を紹介していきたい。

一九五一年一〇月 室蘭市労働会館「原爆の凶展」

室蘭の「原爆の凶展」については、日鋼室蘭（日本製鋼室蘭製作所）文学サークルの会員だった広田義治の証言が詳しい。会期は一九五一年一〇月二八日から三〇日までの三日間、会場は室蘭駅前の室蘭市労働会館二階ホールだった。当時は各地で労働会館



室蘭市労働会館

が新築されていた時期であり、室蘭市労働会館も前年十一月に開館していた。展覧会は実行委員会によって準備が進められ、委員長は室蘭市立図書館の高内智海館長が引き受けた。

一九五一年一〇月五日付『北海道大学新聞』には「近く札幌で原爆展」との見出しで、道学連（北海道学生自治会連合会）が道内各団体に連絡し、札幌では北海道大学全学中央委員会が中心となつて、市内宗教団体、民科（民主主義科学者協会）、職員組合などと提携しながら展覧会の準備を進めていると報じられている。室蘭で開催された「原爆の凶展」も、道学連などから室蘭工業大学に話が持ち込まれたことが発端のようだ。

当時は米ソ冷戦の緊張の高まりによって「逆コース」と呼ばれる占領政策の転換期を迎えており、室蘭でもレッドパージで職場を追われる人たちがいた。「原爆の凶展」関係者の多くも、こうした時勢の影響を色濃く受けていた。広田は展覧会を担った中心人物として、室蘭工大自治会の飯島孝、日鋼室蘭職員で室蘭地協（地方労働組合協議会）書記長の藤井和吉、元北電職員で室蘭地協書記の伊藤習二、元富士鉄室蘭（富士製鐵室蘭製鐵所）職員の高橋清子、

そして室蘭文学界の指導者的存在だったという元北電職員で新日本文学会室蘭支部の吉田美千雄をはじめ、元全通道青年部長で同じく新日本文学会室蘭支部のかなまるよしあき、日鋼室蘭文学サークル機関誌『ひろば』発行人の久保田俊夫ら文学関係者の名を挙げています。当時の室蘭では『ひろば』の他にも『壁』『北方詩人』『北峡文学』などのサークル誌が発行されており、「原爆の凶展」開催には文学仲間の連携が大きな力を発揮したようだ。

また、民科札幌支部の宮原将平北大理学部教授や、元国鉄労働組合本部常任で平和擁護日本委員会（平和の会）所属の吉崎二郎も札幌から手伝いに駆けつけた。吉崎は俊の故郷・秩父別の隣の深川出身で、兄の與志崎朗よしざきろうが丸木夫妻と同じ日本美術会に属していたという縁から信頼を得て、〈第一期〉および〈第二期〉巡回展のすべてに帯同する唯一の人物となった。

丸木夫妻の画文集『ちび筆』（一九五四年、室町書房）には、最初の予定地だった岩見沢が「手違いで中止」となり、急遽室蘭で開催することになったため、「準備不充分的この街では上を下への大騒ぎ、わたしたちもポスターを十枚二十枚三十枚と描き、会場の大テーブルや演壇を動かし、飾りつけを終えてマイクをそなえつけ、それでも、見た人が伝え伝えて人がふえ、一日二日三日と尻上がりに上って三日間で六千人、やれ安心と最終の夜の座談会のつかれもとれぬ早朝、ねむい目をこすりこすり日夜ふんとうした人人に送られて旭川へと向いました」と記されている。道内有数の工業都市として人口一万人を数えた室蘭には、青函連絡船の一部貨物船が変則的に運行しており、北海道最初の上陸地であったことが展覧会の開催につながった可能性もある。

来場者の感想は、民科札幌支部『地学団体研究部会報』（一九五一年一月七日発行）や『ひろば』第三号（一九五一年一月三〇日発行）に掲載された。「わたしたちはこのてらんかいをみてかなしかったです。せんそうにころされてほんとにくらしかったでせう、わたしたちはころされないでほんとうによかったです。ゆめでもうれしかったです」（常盤小学校 2の6組）という子どもの文章も見られ、幅広い年齢層の人が訪れていたことが伺える。

翌年に発行された『画集普及版 原爆の凶』（一九五二年、青木書店）には、室蘭で「ピカで死んだ妹の子」を連れた婦人が展覧会に訪れ、絵の前で被爆体験を語ったと回想されている。朝食の途中に被爆し、倒壊した家から這い出して血まみれの夫を背負いながら火の中を逃げたことや、少女が一週間後も箸をにぎりしめたまま一本一本指を外してやったこと、少女の頭からは今もガラスの破片が出てくることなど、婦人の体験談はほぼそのままのかたちで三〇年後に絵本『ひろしまのピカ』（一九八〇年、小峰書店）の内容に生かされていることも付記しておきたい。

一九五二年一月 三菱美唄炭鉱労組本部「総合原爆展」

室蘭からはじまった「原爆の凶展」は、俊が高校時代を過ごした旭川や、生家の善性寺で開催された秩父別で盛況となり、札幌では北大学生たちが多角的な視点から原爆をパネルや模型などで分析する「総合原爆展」として大きな反響を巻き起こした。そして函館で〈第一期〉巡回展を終えた丸木夫妻が北海道を離れた後も、北大の学生たちは「全道くまなく原爆展をやろう」と構想を

ふくらませていた。

一九五二年一月一〇日に夕張からはじまった〈第二期〉巡回展には、原爆の図第一部《幽霊》から第三部《水》までの三部作とともに丸木夫妻のアトリエに同宿していた画家の濱田善秀が派遣され、北海道側の責任者として〈第一期〉巡回展にも参加した吉崎二郎が学生たちを率いて展覧会に帯同することになった。

夕張の後、岩見沢、美流渡、幌内を巡回した展覧会は、一月二七日、二八日の両日、三菱美唄炭鉱労働組合本部の二階大会議室で開催された。

三菱美唄労働本部は三カ月前に落成記念式典が行われたばかりで、「総合原爆展」は、道内の労働組合の中で唯一、自前の費用によつて建てられたという組合本部の新築記念事業という意味も含まれていた。展覧会の準備や運営には同労働文化部長の本間務をはじめ、美術サークルの会員たちが携わった。積雪の多い時期であったが、わずか二日間で見学者数は一万人に達するという大盛況。当時の美唄は三菱、三井の旧財閥系二大炭鉱が並立する「炭都」として九万人近い人口を抱え、三菱美唄地区の小中学校には約五三〇〇人の児童が在籍していたが、その多くが団体で見学に訪れ、美唄鉄道を利用して地区外から来場した人もいたようだ。本稿冒頭で紹介した集合写真は、平山と美術サークル仲間の鷺見^{わしみ}哲彦が「子ども絵画教室」の生徒を引率して見学した際に撮影されたものだった。

文化部長の本間は当時の記録を大切に保存しており、アルバムには「総合原爆展」の写真も幾つか存在する。その中には、会場で「原爆全面廃止」の署名をする女性たちの写真があり、背後には原爆の図第三部《水》が写っていた。



三菱美唄展会場で署名をする女性たち(写真上)。背後に写る原爆の図第3部《水》は、背景の薄墨の有無や被爆者の群像の列の形から、原爆の図丸木美術館蔵の作品(写真右)ではなく、広島市現代美術館蔵の「再制作版」(写真左)だと分かる。

この写真に見える絵の細部の特徴によつて、美唄に展示された《原爆の図》は〈第一期〉巡回展の作品(原爆の図丸木美術館蔵)とは異なり、濱田らの同宿人が加わつて「模写」として再制作した《原爆の図》三部作(現在は広島市現代美術館蔵)であったことも判明した。

〈第二期〉巡回展が長期にわたつて全道をまわる大規模な計画であり、丸木夫妻が帯同しなかったこと、〈第一期〉の札幌展場で反米的な感想を掲示したために逮捕者が出たことなどの理由が重なつて、作品の貸出には慎重を期したのだと思われる。

三菱美唄文学会機関誌『炭炎』第五巻第八号(一九五二年九月一日発行)には、「原爆展を見て」という特集が生まれ、本間ほか九名(うち小学生五名)の感想文が掲載されている。その中には「ピ

カドンのおばあさんの言葉（がけくずれとは違つてピカドンは人が落すものだ…）は、わたしの之からの大きな、よりよく生きるための指針になりました」（常盤台一青年）という感想もあるが、「アメリカ」という単語はまったく登場しない。こうした点からも、占領下の厳しい状況における展覧会活動の困難さが垣間見える。

美唄をはじめとする〈第二期〉展が、「観客三十五万人を動員した」（一九五二年五月五日付『北海道大学新聞』）という大成功をおさめたにも関わらず丸木夫妻の記録に残らなかったのは、作品をめぐる複雑な事情があつたためなのだろう。しかし、もちろん〈第二期〉展でも「模写」として公開されたわけではなく、《原爆の図》が作者を離れて巡回した最初の試みが成功をおさめたことは、その後の巡回展の計画にも大きく影響したはずだ。

* * *

占領下の時代にいち早く原爆被害の記憶を伝えた《原爆の図》の歴史的・社会的な意義はたいへん大きい。しかし今回の調査では、「展覧会」という文化活動がそれぞれの個人の人生に残したものの意味についても、あらためて考えさせられた。

たとえば広田は当時、日鋼室蘭の旋盤工として働きはじめたものの、何とか会社を辞めて上京したいと考えていたときに「原爆の図展」に出会い、「人生の転換期」を迎えたと回想する。地域の人々の活動を知った彼は上京することなく、一九五三年夏には「朝鮮戦争休戦を願う夕べ」の開催に奔走。やがて朝鮮戦争後の

人員整理策に対抗した一九五四年の「日鋼室蘭争議」にも深く関わり、その記録を編纂する道を歩むことになった。

今年、室蘭再現展直前の一〇月一八日に逝去した画家の佐久間恭子も、兄のかなまるよしあきが「原爆の図展」に関わっていたこともあつて、展覧会に足を運んだ若者の一人だった。絵の迫力に打たれて二時間ほど立ち尽くし、とうとう会場にいた丸木俊に声をかけることができなかつたという思い出を、生前に電話で拝聴したことがある。彼女は「原爆の図展」の翌年に室蘭美術協会の会員となり、今日まで室蘭の文化を支え続けてきた。佐久間と親交が深かつた北浦は、弔辞のなかで「ここ（原爆展）が本物の画家としてのスタートだったのでないのでしょうか。絵が人々に訴える力というものを、若い金丸恭子は《原爆の図》から学んだのではないのですか？ あとたつた一週間だったので、車椅子でもいいから会場に来られて、もう一度熱く語ってほしかった……」と述べている。

後に美唄東高校で同級となり、今日まで続く友情を育んだ白戸と北浦も、それぞれ別の中学校から引率されて「総合原爆展」に足を運んだという記憶を共有していた。

三菱美唄炭鉱は一九七三年に閉山、炭鉱住宅はすべて撤去され、二人が通つた中学校も廃校となった。労働者とその家族は全国各地に散り、展覧会場の三菱美唄労組本部の跡は雑木林となった。室蘭市の労働会館も今は存在しない。歳月の流れとともにさまざまものが消えていくなかで、しかし、《原爆の図》を観たという記憶は人々の心から消えなかつた。六〇年ぶりの再現展が実現したのも、その記憶が大きな力となつたのである。

占領下の「原爆の図」北海道巡回展の記録

◆第1期巡回展 1951年10月-12月 丸木位里・赤松俊子が帯同 展示作品=《幽霊》、《火》、《水》、《虹》、《少年少女》の5部作

月日	開催地／会場	開催団体	備考・参考文献
10.28-30	室蘭市／室蘭市立労働会館2階「原爆展」	主催=文学関係者・室蘭地協関係者ら実行委員会	11.7 民科札幌支部『地学団体研究部会報』 11.30 日鋼室蘭文学サークル『ひろば』第3号
11.3-7	旭川市／丸勝松村百貨店3階「原爆の図展」	主催=旭川純生美術界、北海道アンデパンダン美術会・平和問題懇談会	11.3 『北海日日新聞』 11.10 民科札幌支部『民科ニュース』
11.10-12	空知管内秩父別村／善性寺「原爆展」		11.12 原爆死者追悼法要開催 11.20 『北海道大学新聞』
11.20-25	札幌市／丸井今井百貨店5階（第1会場、21日まで）、北海道大学中央講堂（22日から25日まで）、富貴堂2階（第2会場）「総合原爆展」	主催=北海道大学文化団体連合会 後援=道学連・北大全学中央委員会 協賛=労働組合、婦人団体など30以上	会場に貼り出した感想文を理由に展覧会責任者が政令325号違反で逮捕される。 10.5 『北海道大学新聞』 11.10 民科札幌支部『民科ニュース』号外 11.20 『北海道大学新聞』 11.23 『北海道新聞』 11.27 『札幌西高新聞』 12.5 『北海道大学新聞』 12.13 『北海道大学新聞』
11.29-12.2	函館市／棒二森屋百貨店2階「総合原爆展」	主催=北大水産学部・北海道学芸大函館分校自治会	12.1 井上頼豊追悼チェロ演奏会 12.5 『北海道大学新聞』

◆第2期巡回展 1952年1月-5月1日 企画=民主主義科学者協会、濱田善秀が帯同 展示作品=《幽霊》、《火》、《水》の3部作

月日	会場／展覧会名	開催団体	備考・参考文献
1.10-14	夕張市／夕張市民会館2階「総合原爆展」	主催=民主主義科学者協会夕張支部	1.10 民科夕張支部『民科ニュース』
1/15-17	夕張市（詳細不明）		2.25 『北海道原爆展ニュース』
1.（不明）	岩見沢市		2.25 『北海道原爆展ニュース』
1.（不明）	空知管内栗沢町美流渡地区／美流渡炭鉱労働組合本部集会室	主催=美流渡炭鉱労働組合	2.25 『北海道原爆展ニュース』

1月(不明)	空知管内三笠町幌内地区／幌内炭鉱労働組合本部大会議室	主催=幌内炭鉱労働組合	2.25 『北海道原爆展ニュース』
1.27-28	美唄市／三菱美唄炭鉱労働組合本部2階大会議室「総合原爆展」	主催=三菱美唄炭鉱労働組合 主管=三菱美唄炭鉱労働組合文化部	2.25 『北海道原爆展ニュース』 9.1 三菱美唄文学会『炭炎』第5巻第8号
1.(不明)	空知管内砂川町		2.25 『北海道原爆展ニュース』
2.(不明)	空知管内上砂川町／砂川炭鉱労働組合本部2階大会議室	主催=砂川炭鉱労働組合	2.25 『北海道原爆展ニュース』
2.6	空知管内赤平町赤間地区／赤間炭鉱労働組合講堂	主催=赤間炭鉱労働組合、赤平地区労働組合協議会	2.25 『北海道原爆展ニュース』
2.8-9	空知管内赤平町井華赤平地区／赤平炭鉱労働組合本部大会議室	主催=赤平炭鉱労働組合、赤平地区労働組合協議会	2.25 『北海道原爆展ニュース』
2.11-12	空知管内赤平町茂尻地区／茂尻中学校集会室	主催=茂尻炭鉱労働組合、赤平地区労働組合協議会	2.25 『北海道原爆展ニュース』
2.14	空知管内赤平町豊里地区／豊里小学校体育館「原爆展」	主催=豊里炭鉱労働組合、赤平地区労働組合協議会	2.25 『北海道原爆展ニュース』
2.16-19	帯広市／藤丸百貨店4階「総合原爆展」 ※2.18のみ十勝会館	主催=帯広地区労働組合	『帯広総合原爆展目録』 2.25 『北海道原爆展ニュース』
2.21-22	根室管内根室町／梅谷会館「総合原爆展」	主催=平和擁護委員会根室準備室	2.20 『根室新聞』 2.25 『北海道原爆展ニュース』 4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
2.24-26	釧路市／釧路市立労働会館「原爆美術展」	主催=日本平和推進国民会議 後援=釧路市、釧路国支庁、釧路国教育委員会釧路国事務局、東北北海道新聞社	2.20 『北海道新聞』釧路版 2.23 『東北北海道新聞』 2.25 『北海道原爆展ニュース』 4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
2.28-3.2	網走市／網走小学校体育館	主催=網走市労働組合協議会	2.25 『北海道原爆展ニュース』 4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
3.6-9	北見市／商工会議所会議室(第1会場)、ビルディング百貨店(第2会場)「総合原爆展」	主催=北見新聞社	2.12 『北見新聞』 2.25 『北海道原爆展ニュース』 3.6-16 『北見新聞』 4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』

3. (不明)	上川管内名寄町／名寄労働会館		4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
3. (不明)	稚内市／稚内市労働会館	主催=宗谷新聞社	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
3. (不明)	留萌市／市立留萌労働会館	主催=留萌地方労働組合協議会	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
3.29	空知管内沼田町浅野地区／浅野雨龍炭鉱労働組合本部会議室	主催=浅野雨龍炭鉱労働組合	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』 木田盈四郎『二十代の航跡』
3. (不明) -4. (不明)	小樽市／小樽市海員会館大ホール	主催=小樽地区労働組合	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
4. (不明)	後志管内余市町		4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
4.4?	留萌市大和田地区／大和田炭鉱大和田会館講堂	主催=大和田炭鉱労働組合	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
4.8-10	苫小牧市／苫小牧製紙労働会館「総合原爆展」	主催=苫小牧地区労働組合 後援=苫小牧民報社	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』 4.8『北海道新聞』胆振日高版 4.8『苫小牧民報』
4.12-20 (予定)	日高管内浦河町／浦河町労働会館	主催=有志による実行委員会	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
	日高管内静内町		4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
4.22-23	空知管内深川町／深川町公会堂 2階大ホール「広島原爆絵画展」	主催=深川町文化連盟 後援=深川町	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
4.24 (予定)	上川管内富良野町		4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
4.25 (予定)	十勝管内足寄村		4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』
5.1	十勝管内幕別町／幕別町民会館	主催=幕別平和の会準備会	4.5 民科札幌支部『民科支部ニュース』 5.5『北海道大学新聞』

※「原爆の図」北海道巡回展の記録の作成には、北海道立図書館の「松井愈氏資料」とともに、白戸仁康氏の調査結果を大いに参考にさせて頂いた。